

○寺子屋に通う児童の家庭から

・2年生児童の家庭（11人家族）

保護者はベビーシッターとして生計を立てていたが、仕事先の家庭から、支払いのための収入がないということで、仕事ができない状態となった。隣人を頼り、一日一食お粥をもらってどうにか凌いでいる。児童は体重が減り、毎日空腹のため泣いている。何に対してもやる気がなく、感情の起伏も激しくなっている。

・3年生児童の家庭（5人家族）

保護者は隣人宅の洗濯を手伝うことで、毎日の生計を立てていたが、立ち入り制限や他者との接触制限がかかったため、仕事ができない状態となった。寺子屋に通う児童の姉がマラリアにかかり薬代を払ったため、貯金が底をつきてしまった。食べるものが一切無い状況が続いている。

・5年生児童の家庭（5人家庭）

保護者は、飲食店で食べ物を売っていたが、営業停止が通達されたため、仕事を失った。近くの商店に、後日払いを認めてもらいトウモロコシ粉を3キロ譲ってもらったが、収入がないため料理をするための炭が買えない。また、手洗いや洗濯をするための石鹼を買うお金もないため衛生状況も劣悪である。

・2年生児童の家庭（9人家庭）

他の家庭の洗濯の手伝いをする事で生計を立てていたが、立ち入り制限や他者との接触制限がかかったため、仕事ができない状態となった。隣人から一日一食お粥をもらっているが、いつまで続くかわからない。砂糖、塩、石鹼等の必需品を買うお金がない。児童は、空腹や栄養失調のため頭痛や腹痛が続いており、不安感や絶望感から、睡眠もままならない。感情の起伏も激しくなっている。

○あしながウガンダ レインボーハウスに登録している児童の家庭から

・11 歳児童の家庭（4 人家庭）

サラダを作り、カンパラ市内で販売していたが、移動制限により継続することができなくなった。親切な人がトウモロコシ粉を分けてくれており、週のうち 3 日は、おかゆを 1 日 2 回、週のうち 1 日は、水と一緒にポショ（トウモロコシ粉を練った主食）を食べて凌いでいる。子どもたちは、不安で睡眠不足、また悲壮感を漂わせている。

・11 歳児童の家庭（6 人家庭）

道路端でキャッサバチップスを販売して生計を立てていたが、営業が停止された。隣人が食事を分けてくれている。週のうち 3 日を朝夕おかゆで過ごす、もしくは週 4 日、1 日 1 食のポショで過ごすこともある。子どもたちは、体重減、不安感、倦怠感にさいなまれている。

・10 歳児童の家庭（6 人家庭）

隣家の家事手伝いとして働いていたが、仕事先の家庭から、支払いのための収入がないということで仕事が継続できなくなった。いつもおかゆを食べ、週に 1, 2 回他の食事をしている。子どもたちは、空腹や倦怠感で、頭痛や腹痛を訴えている他、感情の起伏が激しくなっている。